

# 灰色かび病情報第1号

## (ナス、キュウリ、イチゴ、トマト)

令和5年3月3日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

### 灰色かび病の発生に注意しましょう！

#### 1 発生状況

2月下旬に行った巡回調査において、ナスの灰色かび病発病果率は1.70%（平年0.58%、前年0.20%）、キュウリの灰色かび病発病果率は1.13%（平年0.46%、前年0.00%）で、過去10年と比較し、ナスは最も高く、キュウリは過去3番目に高い状況でした。

灰色かび病は多湿のときに発生しやすくなります。1月、2月は3月中下旬並みの気温となった時期があり、暖房機の稼働時間が短くなる等施設内が乾きにくい条件となったと考えられます。

名古屋地方气象台3月2日発表の1か月予報によれば、向こう1か月の平均気温は高い確率70%です。今後も施設内が多湿になりやすい気象が続くため、灰色かび病の発生に注意が必要です。

#### 2 本病の生態等

本病の病原菌は糸状菌です。多犯性で、ナス、キュウリ、イチゴ、トマトなど多くの野菜、花き類、果樹類を侵します（図1～6）。

病原菌は傷口や、咲き終わってしぼんだ花卉などの枯死した部分から侵入し、そこで増殖した菌が有力な伝染源となります。

気温が20℃くらいで湿度が高いと発生しやすく、盛んに胞子を形成します。胞子の飛散は快晴時には少なく、曇雨天時に多くなります。

菌糸、分生胞子の形で被害組織中に残存し、次作の伝染源となります。



図1 輪紋状の病斑上に灰色のカビが密生したナス果実



図2 ナスの葉にできた輪紋状の病斑



図3 灰色のカビが密生した  
キュウリの幼果



図4 灰色のカビが密生した  
イチゴ果実



図5 灰色のカビが密生した  
トマト果実



図6 トマト果実表面の白色リング状の  
病斑（ゴーストスポット）

### 3 防除対策

- (1) 病原菌は傷口や枯死した部分から侵入します。花卉から侵入することが多いため、開花後のしぼんだ花卉を摘み取りましょう。
- (2) 施設内が多湿になると発病が多くなるので、過剰なかん水を避け、換気を行いましょ
- (3) 発病前から予防散布を行いましょ
- (4) 同系統の殺菌剤を連用すると、殺菌剤耐性菌の発生リスクが高まります。特に本病は薬剤感受性の低下に関する報告が多く、耐性を獲得しやすい病原菌です。耐性菌発生を防ぐため、FRAC コード表を参照して、異なる作用の殺菌剤をローテーション散布しましょ。  
(FRAC コードの詳細は、[https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/code\\_pdf01\\_2022.pdf](https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/code_pdf01_2022.pdf) を参照)
- (5) 被害果、被害葉は伝染源となるので、発見したら速やかにほ場外に持ち出し、適切に処分しましょ。